

8 グループからの報告

第1グループ(502教室)

- ・グループが行政職・相談支援専門員・民生委員など、多業種の集まりであり、色々な立場から、色々な地域のことを聞いた。
- ・その地域の現状や、地域ごとの違いなどを示し、地域性が多様であることを共有化した。(社会資源の現状)地域によって、家賃も異なるなど地域性による違いがあり、その他の壁もある。
- ・地域で暮らす上では、地域性の他、例えば一人暮らしする際には、当事者やご家族の気持ちをどう引き出して行くかということと、同時に地域の方、地元の方、みんなが幸せになるという視点が大切というところで、誰か一人が幸せになればいい、誰か一人が満たされればいいという事ではなく、みんなが生きていく生活していく場という所を改めて考えていく土台として持った方がいいのではないかという話が出た。
- ・これから一人暮らしする際に、その地域で生活していくために必要なことをあげると、些細なことでも相談できる身近な相談者が大切である。それによる安心感の提供につながる。その積み重ねがその一人暮らしをしていることはとても大切である。
- ・一人暮らしを進めていくにあたり、ネットやAIの活用含め人との接触(つながり)は大切である。
- ・各地域での取組みにおいて、良い取組み等が広く地域の中で周知されていない現状から、その周知方法も再確認が必要である。
- ・一人暮らしの当事者が災害時には、様々な障害に応じた必要な配慮・場面に応じた必要な支援・その支援方法など明らかにし備えておく必要がある。
- ・地域で暮らす前の在宅支援のサービスを知ることの大切さや実際の生活する前の準備(体験生活)等も大切である。

第2グループ(501教室)

- ・いろいろな当事者の皆様の生活の姿がある中で、ご本人の希望であるとか、そういったものを聞き取って行けるような支援をしていきたい。
- ・やはり不本意な施設への入所であるとか、入院というものがあると、それを如何になくしていけるか考えていきたい。根本的に施設というものがない方がよい。そのためにも地域の頑張りが必要である。
- ・根間さんの話にもあったように、衣食住だけでなく、夢とか希望みたいなものがあるということが大事である。
- ・地域資源については、その前に支援者としての姿勢がどういったものであるべきか、それを再認識しなければいけない。
- ・同じ環境を共有する仲間のかや、「ピア」な人たちともっと関わっていく。例えば、部会

でも「ピアの人が少ない」といったことの中で、「ピアの力」が地域の中で、もっと大きくなって良いのではと思う。

- ・地域の中でのつながり（顔の見える関係）であったりとか、その人のことをよく知っている人が地域にいっぱいいるなど、そういった顔の見える関係、密なつながりというものを、地域の中に作って行けていることが重要である。
- ・支援者がひとりで抱え込んだりせずに、その地域の中で、みんなを巻き込んでいくというようなことも大事である。
- ・地域移行とは、本来ご本人様に対するアセスメントをもっと丁寧にやることで、如何にその本人のニーズがベースにあるような支援を作っていけるか、どのようなサービスがあるとか、そういう情報が入る仕組みみたいなものも充実させた方が良い。
- ・グループ討議に参加された根間さんより、地域で自立した生活の自由を経験していただきたいと改めて伝えたいと強調された。
- ・当事者の夢とか希望ということ、地域の中にその人の居場所というか、役割のようなものがある、地域の中で役にたてるというような実感が持てる環境整備をしていくことが、地域移行にあたって大切である。

第3グループ（702教室）

- ・各自治体の情報共有があった。
 - A区協議会・・・コロナ禍以降1回も自立支援協議会を開催できていない。
書面開催で実施。
 - B区協議会・・・マンネリ化が課題である。
- ・地域資源の活用の現状
 - C区・・・大変小さな自治体なので、その中にまず本当にすべての資源を集める必要があるのか、話をさせて頂いた。やはり親の会等より、かなり重度のグループホームや施設の不足を指摘されているが、人口減少の中で本当にそれを作り持続可能かと自身は考えている。
 - D区・・・規模が大きい自治体で資源はたくさんあっても足りないという話がでていた。地域移行の観点では、たまたまD区が支給決定しただけで、実際にD区に住んだことがない当事者へ、区内で居住できる資源をつくる必要があるのか？本人の意志とは本当にそういうことなのかという話もあった。
- ・精神の地域移行では、知識が必要という話が発表であったが、そもそも病院の職員がその知識を持っていない。それぞれの自治体で何をやっているかを知らないということがあるという話があり、そこから話題が膨らんだ。
 - E市・・・E市の市民が一番入院している病院に行き、実際に何が退院を阻害しているのかという話を聞いたりした。そこから発展して、実際に自立支援協議会の専門部会へと巻き込んでいくという話があった。
 - F市・・・調査した結果だと長く入所している方の七割以上が60歳以上だということが分かった。さらにF市の特徴として七割以上が女性というのがあった。

- ・病院と話していると、普通の老人ホームに入所要件を緩和して欲しいという話が病院側からもあるということだった。現在、要介護3以上でないと、なかなかグループホームに入れないという中で、やはりそこを緩和していただくことで、病院側としても地域移行ではないけれども、退院させることができるのではないかという話がある。
- ・病院の人が地域に移行するために何が必要かということをもっと知らないことが大きな課題である。それを知っている人に如何に自治体としてつなげていくかという観点の取り組みが必要ではないかと思う。
- ・制度があっても使い方がわからずに病院に居る方が安全だからという理由で、地域の楽しみを知らないまま、ずっと病院にいるだけの方というのもいるのではないかという意見があった。
- ・G市の基幹相談支援センターで、病院の方であったり、保健師さんだったり、行政の方を一堂に集めて研修をやっているそうだが、5~6年続けている中で、そういった研修会を通して顔の見える関係を構築されて、なんとなく成果も現れ始めているという話があった。

第4グループ（701教室）

- ・住まいの確保についての問題や住まいを見つけた後の生活支援の部分について、未だに進んでない現状があるということに対して、どうしていけばいいのかというところを切り口に話した。
- ・住まいの確保は、自治体の担当者から「居住支援協議会との連携」をしているところがあるかどうかというような話から、住まいの確保についての話が上がった。
- ・居住支援協議会や居住支援法人の必要性がいわれている中で、居住についての課題だったり、居住先の確保について、その仕組みづくりをどのように考えていくか、地域の自立支援協議会とどのように連動していくのか、その部分がとても大事になってくるのではという話であった。
- ・居住を確保して行くための制度として、自立支援協議会の中でも居住支援法人や居住支援協議会との連動であったり、地元でそういった居住を考え話し合う場がなければ、作りつつ、自立支援協議会と連動して行く、そういった仕組みづくりを改めて考える必要があるのではと話題になった。
- ・住まいの確保については、不動産業者とどういう風につながるかというような話がメインとなり、不動産会社自体も、いわゆる社会資源であったり、そもそもこういう困りごとをどこに相談していけばいいのかわからない。そういった情報の普及啓発が足りていないのではないかというような話が出た。
- ・住んでいる当事者の方、居住者の方の支援のためにも、不動産会社への普及啓発をして行く。そういった自立支援協議会の取り組みも必要なのではないかというような話が上がっていた。

第5グループ（802教室）

- ・当事者の話や具体的な色々な話が聞けて、すごく参考になったとの意見が多く出された。

- ・今ある社会資源に、どうつなげて行けば良いのか考えるきっかけになった。
 - ・一方で、今あるサービスをただ当てはめるだけの仕事をしていただけかもしれないという振り返りも聞かれた。
 - ・生活の身近な相談相手の存在、今関わってくれている事業所の職員、家族が担ってなどの存在は必要である。
 - ・情報共有として、23区・市ともに、全体的にグループホームの少なさに対する指摘があった。
- H区・・・軒家などの借家で空き家対策・財テクなどの理由、リフォームが新しく増えている実態があり、新規参入の業者も入ってきている。実際、入居した人たちを見守っていく体制が現状に追いつかない。
- ・経済的な支援として、例えば精神障害者の方は福祉手当が無く、家族会の方から要望の取り組みがある。実際、障害年金だけでは生活は難しい。家族も年金生活であったりするのが現実である。
 - ・身体障害者とか知的障害者の方も、重度障害を抱えた中で、地域で自立できるような枠組みやプランが立てられていない。そういう想定がされていない。
 - ・地域移行は、地域移行部会のあるI市が報告。
長期入院されている市内の患者さんに向け、アンケート調査を実施する。その後、地域で具体的にどのようなことができるのか、併せて考えて行く予定である。
 - ・J市より、アパートの体験事業として新たな予算が付いたという報告がある。実際に今年に入って数件の利用実績もあった。
 - ・自分の住んでいるところとは違うところにはなるが、生活体験みたいなことは実際にその患者さんにとって地域で生活するというようなイメージが具体化する。
 - ・保護者の入院等含め、当事者の緊急一時への対応には予算がかかるという報告があった。
 - ・重度障害の方が、地域で生活するにはヘルパー事業所・24時間介護を想定、給付し実際に支給が決定しても、ヘルパー確保が難しい現状がある。
 - ・社会全体として、障害者の人たち一人ひとりが生活するにあたって、やはり、これはとても必要なこととして、共感を得られるようなことがないと、そういうことを進めていくのもすごく難しい。
 - ・K区、L区・・・感染症罹患時の対策として、障害者の家族が陽性になり、障害者本人は陰性である場合の過ごせる場所（施設）を確保したという取り組み報告があった。

第6グループ（801教室）

- ・大事なことは、当事者の声を聞くこと、本人中心であることということの共通理解だと確認した。その上で、地域で暮らすための社会資源を作れているかについて考えた。
- ・「つながる」ということがキーワードである。まず相談につながっている人であるが、氷山の一角なのではないかというような意見が出た。行政の方でも身近なところに支援を必要としている方が、どれぐらいいるのか完全に把握しきれていない。
- ・手帳の取得だったり、社会福祉サービスの申請だったりでは把握はできるけれども、それ

は氷山の一角にしかすぎず、氷山の下に隠れている部分は、やはりつながれていないのではないか。

- ・障害のある方が相談につながる時は、障害種別ごとの専門性や各相談に掛けられる時間や労力によっても差があるのではないか、社会資源に差があるのではないかという意見が出た。
- ・子供の発達障害に関して言えば、子供であることと、その障害があることで、受けられるサービスが、行政の中で縦割りになっているのではないかという指摘があった。
- ・親からしてみれば、我が子に障害という言葉が付くことによって、障害分野のサービスを申請しづらいとか、相談しづらいという意見もあって、相談に行けないと、やはりその今後のライフステージの中で、つながりが薄くなるのが危惧されるので、子供と障害の部分を縦割りにするのではなくて、一括した窓口を設けるなどしていけばよい。
- ・また、ワンストップでやっていけるのがいいのではないかというような意見も出ている。実際にその子供支援のための相談マップ作りを行っていたり、ライフステージでつながっていくために、手をつなぐ親の会の方で、ライフブック（life-book）をつくっているという情報提供があった。
- ・つながるという観点でいえば、地域の社会資源情報につながるということも難しいのではないかという話もあった。
- ・情報がバラバラなのではないか、いろいろなところに散らばっているのではないか、ということもあるが、そこは情報を取りに行くことが大切であるというような意見が出た。
- ・スローコミュニケーションというのか、わかりやすい文章があるので、そういうものを取り入れていくことも大事だという意見があり、東京都のホームページもそういうものを取り入れているということだった。
- ・当事者の方だったが、情報につながる時、例えばスマホだったりがあるけれども、そのスマホの使いかたが難しかったりする。どこにどんな情報があるのかが分かりづらいというようなことがあった。
- ・そのためには身近な相談者だったりとか、あるいはピアサポーターだったりだとか、体験談を交えていくことで支援の連携が密になるというか、支援が形になっていくのではないかというような意見が出た。

第7グループ（902教室）

- ・話題提起を受けて、グループ討議で共通して重要だと感じたものが、地域移行・地域生活支援の前提として「ハード面の充実」が必要であるという話だった。
- ・地域での住まいについて、如何にハードルを低くして確保できるかということが課題としてある。話題提起の中での福井さんの話でも出ていたように、物件探しは障害者の方にとっては、とても難儀するところである。
- ・まずは、ソフト面の充実である。福祉サービスを利用している相談員でも、同じ事業所内の関係ない職員とでも、雑談を交わせるような関係性を築くといったことだったりする。一番の理想は身近なご近所との関係を築くことである。身の回りのことの愚痴をこぼせる

人、何でもいいが、相談できる相手を身近に確保する。

- ・生活の中で不便なこと、例えば、手が届かないから電球を替えて欲しいということのような近所づきあいを重要視していくことが大事である。例えば、ヘルパーを使っている当事者も使っていない人も、その関わりを広げることで、把握できる情報も増え、ゆくゆくは悩みを打ち明けられる関係性を築ければ、人づてで、物件情報であるとか、当事者にとって暮らして行く上で役に立つ良い話をもらえるのではという話になった。
- ・地域の近所との交流は、高齢になるにつれて関わりが薄くなりがちになるので、それがこのコロナ禍ならなおのことなので、行政職の方も今一度考え直す必要がある。

第8グループ（901教室）

- ・社会資源を考える中で、実際に地域移行で長く地域に生活をされていた方の話を伺うことができた。長く地域には住んでいるが、やはりそこには、「ためらい」があり、「怖さ」もあるという思いを聞かせて頂いた。「何10年と生活していても、なかなか地域の中に入れないというところが、実際のところだ」という話を伺って、それぞれの立場で考えてみてもらったが、なかなかそこから先に進まなかったというのが現実であったようである。
- ・地域自立支援協議会の部会について、どうなっているかというところも、それぞれ話を伺った。部会内では活発であっても、部会同士での共有がなかなか難しいということが多く聞かれた。
- ・どのように障害者の方に接していいのかわからないという声もグループメンバーの中にはあり、また、どう接して良いのか分からないという正直なことを仰って頂いたメンバーの方もいた。長くそこに暮らしていても、暮らすという生活の実現だけではなく、生活内容の質というのがベースになっていくのではないかと。また、お互い出来ることがあるのではないかと。それを支える側にもまだまだ出来ることがあるのではないかと話になった。
- ・制度としてあるものを活用するというよりも、もっと身近にあるものを如何に活発にしていくのかというところが、まだまだ出来るのではないかと意見があった。
- ・障害者という枠ではなく、サービスを受けてない方、こぼれてしまう方にも、日常のそういった声も拾えるのではないかと話になった。